

毘沙門沢左俣

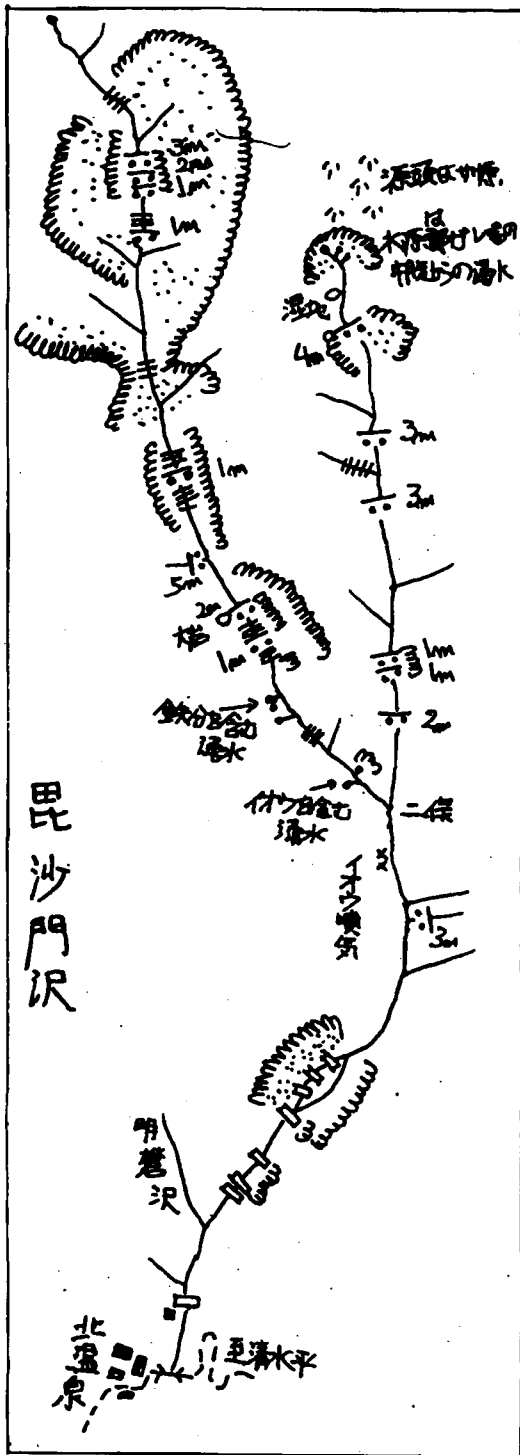
1990年11月3日

朝の空気は冷たい。北温泉の温泉プールからたちのぼる白い湯気がよく目立つ。山々の木々もほとんど葉を落してしまった。那須の山々の短い秋もいよいよ最終段階である。

6:35北温泉のすぐ上流にある砂防ダムから遊行開始。毘沙門沢はかなりの荒沢のようで、河原にゴロゴロしている石のほとんどはするどい岩角をみせており、丸みを帯びた石は少ない。5分程遊ると左手に明礬沢を分ける。明礬沢は水の色も石の色も青白色を呈している。一方毘沙門沢の方は、水は透明、石は赤っぽい。火山地帯を流れる沢によくあることであるが、それぞれに含有している成分が違うようである。明礬沢も荒沢のようである。

毘沙門の方はこのあとたて続けに砂防ダムをかける。どの砂防ダムも鋭い岩角をもつ大小の岩で満杯となっている。そういえば兩岸の岩壁はもろい岩でできており、崩れ落ちた岩がナダレのデブリのような感じで随所に堆積している。こんなところに長居は無用である。

兩岸の側壁が消えると、沢の傾斜がゆるやかとなった。それと同時に沢床の石も丸みをもったものが多く



なってくる。沢の中に転がっている岩が多いことから、これより上流でも崩壊が進行中と思われるが、ここまでと比べるとその規模やスピードは小さいようである。そんな不安定な浮石がゴロゴロする中を漕ぎ抜く。沢はまったく平凡で、滝は出てこない。1カ所イオウ奥のひどいところがある。岩屑がその部分だけ黄白色に変色している。表面からではわからないが、岩屑の下に噴気口があるようである。

7:55二俣。ここまで沢が平凡だったこともあって、ずいぶんとピッチが上がった。左俣に入る。

左俣はしばらくは平凡。ただ所々に湧水地点がある。それぞれの湧水は、イオウ分を含んでいたり、あるいは鉄分を含んでいたりする。水温はぬるま湯程度で、沢の水に比べるとかなり高い。冷たい沢水に慣れた足には、なんだか温泉に足を入れたかのような気分になった。

このあと3カ所に小さなゴルジュが出てくる。いずれも1~2mの小滝をかけるだけであるが、ホールドを拾って登る小滝や、微妙なへつりなどがあって、ちょっとしたアクセントになっている。

8:50稜線と瀧頭の大いなるガレが見渡せる場所に出る。左手には朝日岳の岩峰も見えている。沢はガレ場の中を何筋にも分流している。あとは瀧頭の手前が残されているだけかと思ったら、もう一つゴルジュが出てきた。ガレ場の中の最後のゴルジュである。3つの小滝がかかる。ホールドに恵まれて楽に登るが、最後の3mはシャワーになってしまった。

水量の多い方、水量の多い方へとたどる。いつしかガレ場のカベを乗り越え、灌木帯に入り込んだ。もう沢は細い溝と変わっている。灌木の枝をさけつつ、最後までつめてゆく。毘沙門沢左俣の水源は、灌木帯のなかの湧水であった。このあと稜線の登山道めざしてヤブをこぐ。すぐそこに見える稜線であるが、灌木のヤブはこぎづらく、20分を要してしまった。9:40隠居倉方面の登山道が分岐するピークのやや南方で登山道に出て、毘沙門沢左俣の進行を終える。

毘沙門沢は、全体に明るいガレ場を流れる沢といってよいと思う。イオウ分や鉄分を含んだ水が入っているが、沢の水は充分飲用に耐える。(

[タイム] 駐車場(6:20)→北温泉(6:30)→二俣(7:55)→左俣水源(9:20)→稜線(9:40)→清水平(10:10)